

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）

難治性炎症性腸管障害に関する調査研究

分担研究報告書（平成 29 年度～令和元年度）

「クローン病肛門部病変のすべて」第 2 版の発刊

研究分担者	二見喜太郎	福岡大学筑紫病院外科	教授
	東 大二郎	福岡大学筑紫病院外科	講師
	平野由紀子	福岡大学筑紫病院外科	助教

研究要旨：診断から治療まで一冊に網羅したクローン病肛門部病変の解説書として、2011 年 10 月に刊行した「クローン病肛門部病変のすべて」は、肛門部の診療になじみのない内科医にも活用できる内容となっている。刊行から 5 年以上経過して、診断的、治療的な研究の進歩により追加すべき新しい事項も増え、肛門部癌の増加は早期診断の必要性に迫られている。今回、これらの事項を加えて、さらに実臨床的なものを目指して改訂案を計画し、コアメンバーによる検証を経て、共同研究者の意見を取り入れて改訂を行い、2019 年 3 月完成に至り第 2 版として発刊した。

共同研究者

杉田 昭、小金井 一隆(横浜市立市民病院)、舟山 裕士(仙台赤十字病院 外科)、根津 理一郎(西宮市立中央病院)、福島 浩平(東北大学大学院 医工学研究科消化管再建医工学分野・医学系研究科分子病態外科分野)、畑 啓介(東京大学 腫瘍外科・血管外科)、池内 浩基、内野 基(兵庫医科大学病院 IBD センター)、藤井 久男(吉田病院)、楠 正人、荒木 俊光(三重大学大学院医学系研究科 消化管・小児外科)、板橋 道朗(東京女子医科大学 消化器外科)、亀山 仁史(新潟大学歯科学総合病院 消化器外科)、高橋 賢一(東北労災病院 大腸肛門外科)、木村 英明(横浜市立大学附属 市民総合医療センター)、水島 恒和(大阪大学 消化器外科)、佐原 力三郎(JCHO 東京山手メディカルセンター)、梅枝 覚(四日市羽津医療センター)、太田 章比古(家田病院)、江崎 幹宏(佐賀大学医学部附属病院)、渡辺 憲治(兵庫医大 腸管病態解析学)、平井 郁仁(福岡大学筑紫病院 IBD センター)

部位で、病変は難治性、易再発性で若年で発症するクローン病の長期経過を左右する重要な因子の一つであるばかりでなく、初期症状として早期診断を導く手掛かりになることもよく知られている。「クローン病肛門部病変のすべて」は 2011 年 10 月に刊行し、肛門部の診療になじみのうすい内科医からも評価を得ているが、5 年を経過して、診断、治療における最新の知見ならびに癌合併の増加など、追加すべき事項が増えており、今回、内容の修正に新たな事項を加えて、診断から治療までを一冊に網羅したさらに実践的な参考書の作成を目指した。

B. 研究方法

初版の「クローン病肛門部病変のすべて」には、64 枚の肉眼所見を含めて診断・治療に関する事項を掲載しており、さらに分かりやすい内容を目指して診断的および治療的な最新の事項に画像所見や図説を加えた。肛門癌についても早期癌を追加してサーベイランスに役立つ内容として改訂案を作成し、外科医 5 名のコアメンバーの検証を経て、肛門科医、内科医も含めた共同研究者の意見を問うた。

A. 研究目的

クローン病において肛門部は罹患頻度の高い

C. 研究結果(改訂の内容)

Perianal fistula に対する呼称の変更はその理由を記載することで同意を得た。診断的事項としては、AGA「Perianal fistula」の分類、肛門部診察の体位、金属ブジーなどを追加した。病変としては、skin tag、edematous pile、ulcerated edematous pile の違いが曖昧になっており解説を加えた。肛門部癌のサーベイランスとしての麻酔下肛門観察(EUA)および生検の意義を解説。治療的事項としては、治療目標の記載、瘻孔例に対する治療法の選択、とくに seton 法については cutting seton と loose seton の手技を具体的に解説、また人工肛門造設および直腸切断術後の合併症についての記載を加えた。症例呈示としては、症状のない軽症例、肛門管 - 腔瘻、尿道瘻の MRI 所見の追加、その他軽症例から癌合併まで病態別に分かりやすく整理した。

D. 考察

初版の「クローン病肛門部病変のすべて」に不足した事項ならびに新しい知見を加えることにより、診断的、治療的に実臨床で、とくに肛門部の診療に不慣れな内科医にも分かりやすいクローン病肛門部病変の解説書になると考える。また、肛門部癌は頻度は低いがクローン病患者の生命予後を左右する重要な因子であり、症例呈示を参考に早期診断さらにサーベイランスへつなげるものと考え。

E. 結論

クローン病において、長期的な QOL の維持に肛門部病変の管理は不可欠であり、一冊の解説書があれば診療科を問わず、より適切な対応につながり、ひいてはクローン病患者の生産性の向上を導くものと考え。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

参考文献

- 1) 渡辺守、佐々木巖、二見喜太郎:クローン病
肛門部病変のすべて - 診断から治療まで - 、
厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」. 平成 23 年度研究報告書別冊, 2011.10.
- 2) Irvine EJ. Usual therapy improves perianal Crohn ' s disease as measured by a new disease activity index. J Clin Gastroenterol 20: 27-32, 1995
- 3) Sandborn WJ, et al. AGA technical review on perianal Crohn ' s disease. Gastroenterology 125:1508-1530,2003
- 4) Taxonera C, et al. Emerging treatments for complex perianal fistula in Crohn's disease. World J Gastroenterol 15:4263-4272,2009
- 5) Marzo M, et al : Management of perianal fistulas in Crohn's disease: an up-to-date review. World J Gastroenterol. 21:1394-1403, 2015